



TITLE:

初期ハイデガーと哲学史：『存在  
と時間』への道(Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

君嶋, 泰明

---

CITATION:

君嶋, 泰明. 初期ハイデガーと哲学史：『存在と時間』への道. 京都大学  
, 2017, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20119>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	君嶋泰明
論文題目	初期ハイデガーと哲学史：『存在と時間』への道		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論は、1910年代末から20年代後半におけるハイデガーの思索、すなわち、いわゆる「初期ハイデガー哲学」が西洋哲学史と切り結んだ関係について、従来とは異なった見取り図を与え、ひいてはハイデガーの主著『存在と時間』（1927）に対する新たな解釈を与えることを目指した論考である。</p> <p>『存在と時間』に先立つこの時期のハイデガーの思索は、主として、講義録という形で、現在、公刊されている。それらの講義録の中で、ハイデガーは、先行する様々な哲学者を取り上げ、彼らを独自の仕方では解釈しつつ、自らの思索を練り上げようとしていた。一方、これらの講義録が結実した『存在と時間』では、哲学的な考察は後景に退き、人間存在の現象学的・存在論的分析が前面に押し出されている。このような事情を踏まえ、「初期ハイデガーの哲学史研究は『存在と時間』にどのような影響を与えたのか」、「そもそも初期ハイデガーは、先行する哲学者たちに対して、どのような態度をとっていたのか」といった問いがハイデガー研究者たちの間で立てられ、様々な解釈が提案されてきた。</p> <p>これらの先行研究の多くは、概して、一つの共通した見方に立ってきた。それは、初期ハイデガーが、特に、アリストテレスを中核とする西洋哲学の根幹的伝統に対して、一貫して、極めて批判的であったという見方である。このような見方の背後には、『存在と時間』におけるハイデガーの哲学史に対する冷淡な態度や、アリストテレス以来の西洋形而上学の伝統との全面戦争に踏み切ったともとれる後期ハイデガーの立場に関する、いわば後知恵が透けて見える。多くの先行研究は、後期ハイデガーから初期ハイデガーを解釈するという、いわば一種のアナクロニズムに陥っていたのである。</p> <p>それに対して本論は、このような先入見を排し、初期講義録を綿密に読み解くことで、初期ハイデガーと哲学史、特にアリストテレス的伝統との関係が、批判一辺倒という単純なものではなく、極めて両義的なものであったことを明らかにしようと試みた。その上で、本論は、この哲学史に対する両義的な関係が、『存在と時間』においても通奏低音として響いているという新解釈を提示するのである。</p> <p>このような「初期ハイデガーと哲学史」に関する斬新な解釈を支える根拠となるのが、本論が、初期講義録と『存在と時間』の中に一貫して流れていると主張する、初期ハイデガーの「哲学的問題関心」、すなわち「自らの生の動機を明らかにすることを目指しながら、結局はそれを明らかにすることができない」という人間の宿命を明確に描き出そうという問題意識である。</p> <p>本論の言う、この初期ハイデガーの問題意識は、ある部分ではアリストテレスの人間観を、また別の部分ではアウグスティヌスのそれを継承したものである。この意味で、『存在と時間』をも含めた初期ハイデガー哲学は、アリストテレス的伝統に対して、それを部分的には肯定し、部分的には否定するという、極めて両義的な態度を見せることになるのである。</p> <p>また本論によれば、初期ハイデガーの講義録は、まさにこの問題意識を自ら明確化するプロセスに他ならないとされる。例えば、それは、最初期の講義であるリックカート批判では、十分に明確化されないまま、しかしその批判のベースに既にして据えられており、また初期ハイデガーによるフッサール現象学の受容に際しても重要な背景をなしているとされる。そして、このような問題意識は、アリストテレス</p>			

やアウグスティヌスを直接のターゲットとする諸講義において、いよいよ、その姿を明瞭に現し、それに続くデカルトに関する講義においては、既にデカルト批判のバックグラウンドの役割を果たすにいたるとされる。

このような、極めて大局的な観点の下、本論は、難解を極める初期講義録を読み解き、初期ハイデガーがアリストテレス的伝統との間に切り結んだ、従来見落とされてきた両義的な関係を明るみに出すとともに、初期講義群の間に一貫した思索の流れを読み取ることが試みているのである。

(論文審査の結果の要旨)

20世紀最大の哲学者の一人と目されるハイデガーは、1910年代末からフライブルク大学やマールブルク大学で講義を行い、1927年に公刊された主著『存在と時間』に結実する思想を育んでいた。初期フライブルク期と呼ばれる、この時期の講義の講義録は、20世紀後半から21世紀初頭にかけて相次いで公刊され、未完に終わった『存在と時間』の理解に資する資料として、内外の多くのハイデガー研究者の注目を浴び、キシール『ハイデガー『存在と時間』の生成』(1993)をはじめとする多数の研究成果が蓄積されてきた。

本論は、これらの先行研究を十分に踏まえた上で、ハイデガーの初期講義録の綿密な読解を通じて、(一) それらと『存在と時間』に共通する、ハイデガーの一貫した哲学的問題意識をあぶり出し、(二) その問題意識に照らして、初期講義録におけるハイデガーの思索の展開を独自の仕方で再構成した上で、(三) 『存在と時間』について、通説とは異なる斬新な解釈を提案することを目指した論考である。

本論が読み取る初期ハイデガーの問題意識とは、「自分は何を行なおうとして生きているのか」という問いに答えること、言い換えると「自らの生の動機を明らかにすること」を目指しながら、結局はそれを明らかにすることができないという人間の宿命を明確に描き出すことにあった。このような、いささかねじれた人間観を、ハイデガーは、アリストテレスとアウグスティヌスという互いに異質な哲学者から継承したと、本論は主張する。具体的には、上記の人間観のうち、「自らの生の動機を明らかにすることを目指している」という部分はアリストテレスに、「生の動機を明らかにすることは結局できない」という部分はアウグスティヌスにそれぞれ由来するとされるのである。

このような問題意識に照らし、第一章から第四章の諸章で、初期フライブルク講義録の読解が行なわれる。第一章「リッカート批判とハイデガーの立場」では、新カント派の哲学者リッカートに対するハイデガーの批判が、実は上記の人間観を(それについての明示的な言及はないものの)踏まえたものであることが指摘される。これは、コバックス(1994)、ハインツ(2000)といった先行研究においては見られない、本論の創見である。

次に第二章「アウグスティヌスから受け取ったもの」では、ハイデガーによるフッサール現象学の継承は、アウグスティヌスの人間観の枠組みの中でなされたという主張がなされる。初期フライブルク期のハイデガーとフッサールの間の比較研究は、すでに数多くなされているが(例えばフォン・ヘルマン(2000)、クロウエル(2001)、ダールシュトローム(2001))、このような角度からアプローチした研究は、従来、見られなかった。

さらに第三章「アリストテレス解釈の意図」では、ハイデガーのアリストテレス解釈が上記の人間観に焦点を当てたものであったことが示された上で、アリストテレスが、「自らの生の動機を解明する」という人間の課題の遂行に対して、(アウグスティヌスとは対照的に)過度に楽観的な見通しを持っていた点が批判されていると主張される。初期ハイデガーのアリストテレス解釈に関しても、既に多くの研究蓄積があるが(代表例としてはイファンティス(2009))、本論はそれを、独自の文脈の中で読み解こうとしているのである。

また第四章「デカルトを規定している伝統」では、ハイデガーは、デカルトの人間観を、アウグスティヌス的な洞察を決定的に欠いたものとして批判しているという読みが示される。これまた、初期ハイデガーのデカルト解釈に関する先行研究(例えばショッキー(2010))では触れられてこなかった論点である。

以上のような初期講義録に対する本論の解釈は、総じて、従来は見逃されてい

た「初期ハイデガーの一貫した問題意識」という新たな観点から講義群を読み直した試みとして高く評価できる。特に、アウグスティヌスが初期ハイデガーに重要な影響を与えていたことを、コイネやマッグラースらによる従来解釈よりも更に一步踏み込んで明らかにした点は、本論の特筆すべき創見であると言える。

初期講義録に対するこのような解釈を踏まえ、第五章では『存在と時間』に対する独自の解釈が展開されている。『存在と時間』は、しばしばアリストテレスに代表される西洋の古典的な存在論・人間観に対する批判の書として受け取られてきた。本論に言わせれば、このような従来解釈は、半分は正しく半分は間違っている。『存在と時間』のハイデガーは、「生の動機を解明する」という課題を背負った存在というアリストテレス的人間観を継承する一方、アウグスティヌスに寄り添いつつ、その課題が果たせない点にこそ人間の本来のあり方を見て取っているのである。この意味で、本論は、『存在と時間』のアリストテレス的伝統に対する態度が、極めて両義的であることを示したのである。

その上で本論は、『存在と時間』の鍵概念の一つである「時間性」は、「（自分では決して経験できない）来るべき死に対する先駆的覚悟性」という文脈においてではなく、むしろ「生の動機を解明する」という「（生きている限り続けられるべき）継続的な営為」の枠組みとして理解されるべきであると主張する。

このような本論の主張は、従来『存在と時間』解釈に再考を迫る極めて大胆で挑戦的な解釈であり、今後、学界においても大きな論議を呼ぶことになろうと思われる。

とはいえ、本論にも全く瑕疵が無いわけではない。中でも、初期ハイデガーの現象学的側面についてはそれなりの議論がなされている反面、その解釈学的側面がほとんど顧慮されていない点は、ハイデガー解釈として一面的であるという誹りを免れないであろう。また肝心の『存在と時間』の解釈も、十分に委曲を尽くしたものとは必ずしも言えない点も惜しまれる。

一方、公刊著作に比べても、より一層難解で錯綜した講義録の読解に粘り強く取り組み、そこに一貫した哲学的問題意識を読み取ろうとした本論の姿勢は大いに評価されてしかるべきである。また上で指摘した問題点は、筆者の今後の精進によって、近い将来、克服されることが十分に期待できるものでもある。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成28年12月26日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。